可愛い女の子に攻略されるのは好きですか？
Do you like to be captured by a cute girl?
高2に タイムリープ した俺が、当時好きだった先生に告った結果
GA文庫ラブコメフェアSS集
ショートストーリー
29と JK
ちょっぴり年上でも彼女にしてくれますか？
～まもりぱんちょうどはおんなじ～
GA文庫

「シングルで十分だよ」

「いや、それは狭いって」
俺が否定すると、柊木ちゃんはさらにそれを否定した。
「狭くないよ！　ちょうどいいじゃん」
むー、と唇を尖らせながら拗ねる俺の女神様。
休日、誰にも見つからないであろう遠くのショッピングモールまでやってきた俺たちは、デートを楽しんでいたんだけど――。
「いやいや、二人で寝る用ならダブルベッドでしょ」
ちょっと立ち寄った家具、寝具などを売っている有名雑貨店で、意見が完全に割れていた。
「ダブルじゃなくてもいいじゃん！　シングルで十分だよ」
と、柊木ちゃんは鼻息荒く主張する。
事のはじまりは、『同棲したらどういう家具を置きたいか』という、俺の何気ない質問だった。
実際、タイムリープが解除された未来では同棲をしているし、まあ、そう気の早い話でもないと思う。

ソファやその他家具は、別にこんなことにならなかったけど、ベッドのサイズで大揉めだった。
「先生、ちょっと考えてもみて」
「先生じゃなくて春香さんですぅ！」
「間違えた」
「わざとでしょっ」
ぷんすこ怒って、俺をパシパシ、と叩いてくる。可愛いので、これからも積極的に間違えていこうと思う。
「春香さん、夏はくっつき過ぎて暑くなるよ」
今、柊木ちゃんちの家にあるベッドはシングルサイズ。すごく狭いわけでもないし、一緒に寝てて床に落ちた、なんてこともないから、不十分というわけでもないんだけど。
せっかくなんだから、俺はおっきなベッドがいい。
「暑くても我慢する」
「その分冬はあったかいでしょ？」
「まあ、そうだけど」
なんでそんなにシングルベッドにこだわるんだろう。何か理由があるのか？　いまいち釈然としない。

遠出したのもあって、柊木ちゃんちに帰って来たのは夜遅くで、家にも帰れるけど泊まることにした。

今日も今日とて同じベッドに寝る。もちろんキス以上のことはしない。

「ダブルベッドだったら、ちょっと離れるでしょ？　誠治君まで遠くなっちゃうからヤなの」

毛布から顔を出した柊木ちゃんはそんなことを言った。

「遠い？」

俺が訊くと恥ずかしそうに言った。

「……すぐちゅーできないなら、その距離は遠いっていうことだから……」

なんて可愛い人なのか。

「もうっ、早く寝てっ」

俺から離れることなく、ぷい、と器用に顔だけ背けた柊木ちゃん。

もし次選ぶ機会があるなら、シングルベッドに賛成しておこう。

体操服の罠

体育の授業、校外マラソンの時間。

帝が他の生徒たちを大きく引き離して角を曲がると、地面に倒れている姫沙に遭遇した。

姫沙は悩ましい躰を惜しげもなく投げ出し、膝には血が滲んでいる。

「帝……いいところに来たわ……。ちょっと失敗して転んじゃって……自分では歩けそうにないの。おんぶして、くれないかしら……」

姫沙は上目遣いでおねだりしてくる。短パンの裾から伸びた太ももが眩しい。

その姿は非常に蠱惑的で、帝も姫沙をおんぶしたいのは山々なのだが。

「いや……明らかに罠だよな。先頭を走ってる俺より前で転んでるのおかしいよな？」

帝が指摘すると、姫沙はびくりと肩を跳ねさせた。

「そ、それは……周回遅れよ！　一周遅れちゃったのよ！」

「転んで遅れているあいだ、誰もお前を助けてくれなかったのか？　というか、負けず嫌いなお前が『失敗して転んだ』とか『周回遅れ』なんて簡単に認めるか……？」

帝の追及に、姫沙は冷や汗を流す。

「い、いちいちうるさいわね！　帝がおんぶしてくれなかったら、他の男子か先生がおんぶしちゃうことになるけど……帝はそれでいいの」

「くっ……」

絶対に嫌だと焦る帝。

「ふふん、さあ、どうする？　おんぶする？　おんぶしなさいよ！」

姫沙は笑顔で両腕を伸ばす。無邪気な仕草に、帝の心臓が撃ち抜かれる。

「……ほら。摑まれ」

帝は姫沙に背を向けてしゃがみ込んだ。

姫沙は嬉々として帝の背中にしがみついてくる。

ひんやりとした髪が帝の首にかかり、甘い香りが鼻腔を襲う。

「ふふふ……引っかかったわね！　これで帝は二度と私から逃れられないわ！　そう……帝が私のことを好きと言うまで、私はあなたの背中から絶対に降りないのだから！」

「おんぶお化けか！」

しかし好きと宣言しなければ永遠に姫沙を背負っていられるのかと思うと、それもアリかもしれないと帝は感じてしまう。

だが、長く理性が保つ自信はない。背中に押しつけられている姫沙の胸、そのやわらかな破壊力に、皮膚だけではなく大脳の深部が侵食されていく。

「さあ出発よ！　これから帝は私の馬！　まずは北海道まで走りなさい！」

「無茶言うな！　さっさとゴールするぞ！」
帝は姫沙が落ちないよう両脚をしっかり摑み、全速力で駆け出した。

27歳ですがなにか？

「『GA文庫ラブコメフェア』ですよ、織原（おりはら）さん！」
「……そう、だね」
「全国の専門店で対象のラブコメ作品を二冊購入すると、俺達の作品――『ちょっぴり年上でも彼女にしてくれますか？』を含めた『4タイトルのSSが読めるしおり』がもらえるそうです。これは買うしかないですね！」
「……うん、そうだね」
「あの、織原さん……？　なんでそんなテンション低いんですか？　お願いしますよ、テンション上げてくださいよ。俺だって恥ずかしいの我慢して、若干スベってるのも覚悟の上で、メタの壁を越えるネタをやってるんですから」
「そりゃね、私も頑張ってテンションあげようかと思ってたけどさ……やっぱりこう、いざズラッと横並びにされると、キツいものがあると言いますか」
「はい？」
「あのさ、桃田（ももた）くん……『GA文庫ラブコメフェア』の対象作品でさ、メインヒロインで私より上の子って、いる？」

「……ラブコメ作品におけるメインヒロインが誰かという問題は、一概（いちがい）には語れないことなので、まずはその定義をきちんとしてもらわないと――」
「いや、回りくどいこと言って話逸（そ）らさなくていいから。じゃあ表紙の女の子でいいよ。表紙のヒロインで、私より年上って……いる？」
「……いません」
「いないよね……。最年長だよね……」
「……最年長ですね」
「ぶっちぎりだよね」
「ぶ、ぶっちぎりというほどでは……」
「……ふっ、ふふふ……そりゃね、ライトノベルっていうのは、中高生向けコンテンツだもんね。アラサーのおばさんがピンで表紙飾ってたらおかしいよね……。なんかもう、全体的にごめんなさい。表紙の制服姿でJKヒロインだと勘違いして買った人がいたら、ごめんなさい。表紙のオビ文句で『27歳の「お姉さん」』って強引に言い張っちゃって、ごめんなさい……」
「で、でも織原さん！　最近ラノベ業界、おっさん主人公が流行ってるっぽいですから！　だったら逆に、おばさんヒロインってのが流行っていく可能性も――」
「――桃田くん」
「は、はい」

「私が自分で自分のことを謙遜(けんそん)して『おばさん』って言うのはいいんだけど、そっちから普通に『おばさん』って認定されると……心がへし折れそうになるから、気をつけてください……」

「……すみません」

29とJK

「ラブコメの名作とJK」

俺と南里花恋は、十三も歳が離れている。
年号どころか世紀すらまたぐ恋愛なので、ギャップを感じることも多々あり……。
「ラブコメで好きな作品ですか？　『たいようのいえ』ですね」
秋葉原の高架下にあるルノアール店内で、向かい側に座る彼女は言った。
オタクの街にふさわしく漫画・アニメの話でもしようと思い、話題を振ってみたわけだが――
いかん、名前しか知らんぞ。たしか少女漫画。俺の守備範囲外だ。
どんな内容か尋ねると、花恋は目をきらっきらさせて身を乗り出した。
「24歳のサラリーマンと女子高生のラブコメです！」
「……へー」
「年齢差はわたしたちのほうが上ですね！」
「犯罪臭も俺たちのほうが上だな」
自分で言うのもどうかと思うが、事実なのでしょうがない。
「そういう槍羽さんの好きなラブコメは？」
「そりゃもちろんＴｏ……」

言いかけて、はたと気がついた。このタイトルはやばい。
「Ｔｏ？」
「Ｔｏ……『とらドラ！』」
見たか。これがサラリーマンの危機回避術。
花恋は「あー」と手を叩き、
「花恋も好きです！　生徒会長と大河が殴り合うシーンとか、みのりんと亜美ちゃんが殴り合うシーンとか最高ですよね！」
「殴り合ってばかりだな」
もちっとロマンチックなシーンあるだろ。ちゃんとラブをコメろよ。
「そういう槍羽さんが好きなシーンは？」
「春菜ちゃんと古手川がスライムに襲われるシーンかな」
「すらいむ？　そんなシーンありましたっけ？　スピンオフですか？」
きょとんとする彼女の顔を見て我に返る。いかん。まだＴｏのイメージが残ってた。
「……ま、いろんな名作をお手本にして、作品を書いていくといいかもな」
そんな風にはぐらかすと、小説家志望のＪＫは「はいっ！」と元気よく返事した。
「じゃあ次の新作は、スライムの女の子とサラリーマンのラブコメにします！」
だから、スライムは忘れろォ！